

ひとつの出発点
～書跡資料研究会～

増田 孝

(愛知文教大学副学長・教授)

社会人学生入学へ向けて

愛知県名古屋市の北東部、岐阜県多治見市の隣、小牧市に位置する愛知文教大学はまだ歴史も浅く、平成一〇年の開学で、今年ちょうど開学一〇年目にあたります。去る三月末には七期の卒業生を送り出したところです。本学の学部は国際文化学部、国際文化学科（外国語専攻／日本文化専攻）で、語学教育を中心に据えて、日本および諸外国の文化を学修できるということを柱としているたいへん小さな大学です。また、教員免許状を取得するための教職に関する科目や、博物館学芸員資格課程科目といった資格関連

科目も用意しています。一学年の学生定員は一三〇名でその一部に留学生・社会人学生がいます。

そもそも本学の立地条件を考えてみますと、小牧市との密接な関係は大前提で、その意味合いにおいて「知の地域社会への還元」がもともと重要な課題としてありました。

その考え方に基づいて（当初より社会人入学の枠は存在しているのですが）本学では三年ほど前からより強力に社会人へ門戸を広げようと舵を切りました。本格的に力を入れた三年前というのが、はたして遅かったのか早かったのかは一概には言えないと思うのですが、募集を続けると、それ以来、毎年一定数の社会人が入学し、彼らが一般の一

八歳学生に溶け込んで机を並べて勉学にいそしみ、大学祭をはじめ各種の行事にも積極的に参加し、学園生活を楽しくんでいる姿が見られるようになりました。われわれとしては結果的には所期の目標は達成しつつあるように思っています。

当初、年齢的にも開きのある社会人が増えた場合に、若い学生や少なからぬ留学生たちといかなる学園生活を送ることになるかというような不安も含めて、教職員にとっても未知数のことは少なくありませんでした。

書跡資料研究会の発足

本学学長の坂田新の発案で標記の研究会を立ち上げたのは開学後間もない平成十一年（一九九九）一月のことでした。坂田学長の専門は漢文学。一方、筆者は日本の歴史が専門で、大学では古文書学や書跡史、日本文化史を担当しています。いずれにしましても私たちの領域は「書」を共通項として持っているのです。すでに四〇年近くの旧知でもある私たちはともに、先人が筆で書き遺した「書跡」を研究の素材にするとということ、書を素材としながら、文学の立場や歴史の立場から、これらを解読・解析することを研究の出発点とするということを共有していました。つ

まり基礎的な部分で研究者としての相互理解がこれまでに培われていたことがひとつの力となったと今では考えています。こうした過去を経て「書跡資料研究会」の発足となったわけでした。

書跡資料研究会は毎月の第三木曜の夕方、名古屋市栄のNHK名古屋放送局の二階にある一室を借りて行っています。三月と八月とを除く年一〇回、これまで一度も休まずに開催しています。

一般の市民に呼びかけて研究会を始め、それが今もなお継続しています。今年の四月には第九三回を重ねましたので、もう十年になります。この会が、途中一度の休みも無く今まで存続するだろうということは、私自身はじめ誰ひとり予想もなかったことでしょう。会員数は当初二〇人前後でしたが、今では五〇人ほどが登録しています。常時出席する人は三〇人を越しているでしょう。さいわい受付等の事務的なことはNHK中部ブレインズのOBの方が世話人を引き受けてくださり、会場の設営などあれこれと面倒を見てくださっているのはほんとうにありがたいことです。

さてここで過去の書跡資料研究会内容の一部をご紹介します。

表 1 (職は当時)

・女房奉書について (1999, 2, 18 増田 孝教授)
・兵法書購読 (1999, 7, 15 村林正美教授)
・井上文雄の詩を読む (1999, 9, 16 坂田 新副学長)
・片仮名資料について (1999, 10, 21 大槻 信講師)
・資料の年代測定について (1999, 12, 16 名古屋大学年代測定センター 小田寛貴氏)
・能書としての藤原教長 (2000, 10, 19 黒田彰子教授)
・新井白石の手紙 (2000, 11, 16 増田 孝教授)
・サンスクリット語筆写資料について (2000, 11, 16 遠藤 康助教授)
・明恵を読む (2000, 12, 21 大槻 信講師)
・桑名藩士の水練功名 (2001, 1, 18 村林正美教授)
・金石文概説 (2001, 4, 19 坂田 新副学長)
・尾張藩の古文書 (2001, 5, 17 熱田高校教諭 鬼頭勝之氏)
・江月宗玩の手紙を読む (2001, 6, 21 増田 孝教授)
・『安濃白水記』巻3「藤堂家御上国の事」を読む (2001, 7, 19 村林正美教授)
・戦国時代の武将の手紙について (2001, 9, 20 蓬左文庫学芸員 下村信博氏)
・吉野の桜 (2001, 10, 18 黒田彰子教授)
・般若心経梵字写本を読む (2001, 11, 15 遠藤 康助教授)
・千利休の手紙 (2002, 1, 17 増田 孝教授)
・鶴舞図書館蔵尾張名家詩 (1) (2002, 2, 21 坂田 新副学長)
・宝蔵院流槍術極意書を読む (2002, 2, 21 村林正美教授)
・山岡直記筆七言詩屏風 (2002, 4, 18 坂田 新副学長)
・母がPAPA? (2002, 6, 20 大秦一浩講師)
・簡体字あれこれ (2002, 9, 19 川田 健講師)
・三河に生まれた尾張 (2002, 10, 17 名古屋国立博物館学芸員 鳥居和之氏)
・幕末松本藩士 (藤井東太郎) の旅日記 (2002, 11, 21 村林正美教授)
・独立性男の詩 (2003, 1, 16 坂田 新学長, 増田 孝教授)
・才葉抄講読 (2003, 1, 16 黒田彰子教授)
・芳春院の仮名手紙 (2003, 4, 17 増田 孝教授)
・後柏原天皇宸翰詠草短冊 (2003, 6, 19 増田 孝教授)
・「冒読」は冒讀か—漢字とコンピュータ (2003, 7, 17 川田 健講師)
・小堀正之の手紙を読む (2003, 9, 18 増田 孝教授)
・柳生宗矩に宛てた沢庵宗彭の手紙 (2003, 11, 20 増田 孝教授)
・松本藩お家騒動と忍術家芥川家 (2003, 12, 18 村林正美教授)
・てには秘伝書購読 (2004, 2, 19 大秦一浩講師)
・妙顕寺日豊の手紙 (2004, 5, 20 増田 孝教授)
・武術家の文通録 (2004, 6, 17 村林正美教授)
・碑碣談 (2004, 9, 16 坂田 新学長)

・聖護院興意法親王和歌 (2004, 11, 18 増田 孝教授)
・短冊講話 (2005, 1, 20 増田 孝教授)
・江勢紀行を読む (2005, 4, 21 村林正美教授)
・三宅亡羊の手紙 (2005, 9, 15 増田 孝教授)
・佐藤牧山「寿星贊」など (2005, 10, 20 坂田 新学長)
・吉良流礼法と吉良上野介 (2005, 12, 15 村林正美教授)
・本阿弥光悦の手紙 (2006, 1, 19 増田 孝教授)
・天保11年 (1840) 下那珂西村百姓乙蔵の敵打ち (2006, 7, 20 村林正美教授)
・藤木敦直と大師流の書 (2006, 10, 19 増田 孝教授)
・『吉備大臣入唐絵巻』を読む (2006, 11, 16 岡田美穂講師)
・後柏原院添削のある中院通胤の詠草 (2006, 12, 21 増田 孝教授)
・『草字訣』について (2007, 15 坂田 新学長)
・二通の千利休の手紙 (2007, 4, 19 増田 孝教授)
・越後の一農民中澤松太郎の安政四年伊勢参宮日記 (2007, 5, 17 村林正美教授)
・御伽草紙『羅生門』と頼光四天王説話 (2007, 10, 18 岡田美穂講師)
・彦彦周良の詩 (2007, 11, 15 坂田 新学長・増田 孝教授)
・烏丸光広の手紙 (2008, 1, 17 増田 孝教授)
・寛政12年 (1880) 旅人孫右衛門の病死とその取り扱いについて (2008, 2, 21 村林正美教授)
・本阿弥光悦の手紙 (2008, 4, 17 増田 孝教授)

前にも述べましたとおり、毎度、漢文学や日本の古文書の専門家が講師を務めることがほとんどです。外部の方を講師に招聘したりもしましたが、近年は本学の教員を中心としています。これまでの講座内容の一部をご紹介します (表1)。

社会人学生として

書跡資料研究会の会員層は、おおむね仕事をリタイアした人たちが多くようです。もちろん若い方も少なくありませんが、いずれも書への関心をお持ちの方ばかりだと思います。中には古文書の先生や、茶道の先生、書道を教えていらっしゃる方、博物館でボランティアをされている方、大学の研究者の方などもいらっしゃいます。現役学生も時にはいます。男女比は半々というところ。五〇人ほど入る教室はこのごろでは毎回ほぼ満員に近い状態です。受講者は書や漢詩文、古文書といった伝統文化への関心の強い方ばかりで、その意味でこの会は本学大学院のサテライト教室のようなものなのです。

異なる点といえば、講師の顔ぶれがご覧のように折々変わることで、テーマ自体も講師の得意分野をお話する、聞く側に見れば贅沢な会なのかも知れません。教室が

名古屋の繁華街栄の地下鉄駅近くに位置するNHKである利便性はいうまでもありませんが、遠くからの受講者もいます。われわれ講師は月に一度だけ、夕方から配付資料を用意し、そそくさと会場へ向かうのです。もちろん講師は手弁当で一切謝礼なし。その意味合いでは、かなり厳しいボランティア活動を下から支えているという気概がなくては、とても続くものではありません。

ある時この会で、本学の社会人学生への呼びかけをし、それに応じて社会人学生への申し込みをしてくださったわけですが、毎年少しずつ入学を果たされ、今ではこの会の出身者が各学年に一定数在籍しているのです。

書跡資料研究会の会員から社会人として入学されている方が少なくないことは、本学の社会人学生のひとつの大きな特色であるといえましょう。

一〇年前に坂田学長と筆者が始めた書跡資料研究会における地道な活動は、現在こうした形で実を結んだといえるでしょう。自画自賛的な話になりましたが、これもこの会を支えてくださっている、多くの方々のおかげと感謝している次第です。